

レクリエーションに関するイメージの研究

—— とくに「楽しい」および「遊び」を中心として ——

○高橋 伸
(国際基督教大学)

川 向 妙 子
(東海大学)

山 崎 律 子
(余暇問題研究所)

イメージ、レクリエーション指導、楽しい、遊び

I 研究の目的

レクリエーション指導において、イメージの問題に着目した理由は、前回の報告¹⁾にみられるとおりである。すなわち、個人が抱くイメージが、その人の行動と極めて密接な関係を有し、一般的には、とくにマーケティングの分野でその傾向が強くみられる。したがって、レクリエーション指導においても、実施しようとする活動に対しての的確なイメージ把握が、効果的指導につながるものではないかと考えられる。

このような観点でイメージ研究がなされたのには1968年高橋(和)ら²⁾の行ったものがみられる。以後、鈴木³⁾金崎⁴⁾らの研究をあげることができよう。前回報告した筆者らの研究⁵⁾は、高橋(和)らが行なった研究の追跡研究という意味で、「レクリエーション」ということばに対するイメージの分析であった。その結果において反応語が最も多かったのが、男女とも「遊び」および「楽しい」ということであった。⁶⁾この意味するところは、「レクリエーションは遊びであり、楽しいものである」というイメージを多くの人が抱いていると解された。

そこで今回の研究の動機は、この「遊び」「楽しい」ということばに対して、どのようなイメージを抱くのかということとを究明しようとするにある。「遊び」に対しての概念規定は、従来からさまざまな立場からなされているのは周知のとおりである。⁷⁾とくにわが国においては、遊びに対しては、一種の罪悪感、ひまつぶしなどネガティブな考え方が過去においては支配的であったと言う。⁸⁾現在においては、常識的には上記のような考え方がないとも観察されるが、果たして変化しているかどうかは明確ではない。

同様なことが「楽しい」ということについてもいえよう。すなわち、楽しいということばは、極く簡単に使用されているが、その意味は非常に複雑といえる。楽しみは主観的な面が強く、個人差もあり、楽しみ方もさまざまである。M・チクセントミハイムは、この楽しさにメスを入れ、フローモデルによってその構造を明らかにしようとした。⁹⁾その他心理学、生理心理学、教育学などからの「楽しさ」の論説もみられる。¹⁰⁾しかしながら、これらは概念としての楽しさの追求であり、現実になが楽しいのかは明確ではない。

そこで今回の研究は、「遊び」および「楽しい」ということについて、イメージの側面から追究を試みることにした。その方法としては、極く素朴ではあるが、特徴を端的に表わす「自由連想法」を採用した。

本研究の具体的な目的は次のとおりである。

- ① 「遊び」「楽しい」に対する反応語の分析と、その傾向の把握。
- ② 「遊び」「楽しい」に対するイメージの構成。

II 研究の対象

本研究の対象は1986年4月に入学した国際基督教大学に在籍する1年生男女学生である。表1に示されるように、男子102名、女子201名、合計303名となっている。

年齢構成は、表2に示した。男子は19才を中心として20才、18才、21才の順に構成されており、平均年齢19.5才となっている。また女子も19才を中心としているが、18才、20才の順に構成されており、平均年齢は0.5才若く、18.9才となっている。

表1 対象者数

性別	人数	人数(%)
男 子	102	(33.7)
女 子	201	(66.3)
合 計	303	(100.0)

表2 対象者年齢構成

年齢	性別	男(%)	女(%)	合計(%)
18才		12 (11.8)	62 (30.8)	74 (52.1)
19才		46 (45.1)	96 (47.8)	142 (46.9)
20才		33 (32.3)	41 (20.4)	74 (24.4)
21才		10 (9.8)	2 (1.0)	12 (4.0)
22才~		1 (1.0)	0 (0.0)	1 (0.3)
合 計		102	201	303
平均年齢		19.5才	18.9才	

III 研究の方法と内容

1. 実施方法

前回の「レクリエーション」に対するイメージの研究と同様「自由連想法」を用いてイメージの測定を行なった。

- 1) 刺戟語: 「楽しい」「遊び」
- 2) 時 間: 2分間
- 3) 回答方法: 用紙記入法
- 4) 制 限: 反応語を名詞・形容詞のみに指定した。

調査の実施は、1986年11月第2週目に行なった。調査用紙を配布した後、口頭にて指示を与えた。はじめに、「楽しい」についてのイメージを記入し、休憩後、「遊び」についてのイメージを記入させた。

2. 分析の内容

1) 反応語の分析

個条書きされた反応語を、第1反応語、第3反応語までの2通りについて、前回筆者らが採用した高橋(和)の5分類

によって検討した。

＜5項目の分類＞

感情反応→楽しみ、愉快、明るいなどの反応語としてあらわれたもの。

叙述反応→休養、健康、遊びなど、説明的反応語をあらわしたものの。

種目反応→キャンプ、卓球などの種目をあげたもの。

共在反応→山、海、椅子など活動と共にあるもの。

印象反応→笑い、輪、和など活動に伴う印象反応語としてあげたもの。

2) イメージの一般傾向

再構成されたイメージは、元のイメージに近いものが表わされるという観点から¹¹⁾、反応語の上位5種を、第1反応語及び第3反応語までについてまとめ、一般の傾向を把握した。

IV 結果と考察

1. 反応語の傾向分析

「遊び」「楽しい」における反応語を男女別に第1反応語および第3反応語までの二通りに分けて検討した。

端的なイメージを把握するには刺激語を聞き、最も早くイメージした第1反応語をみることによってできるが、より詳しく全体像をみるため、第3反応語までをみることにした。

1) 「楽しい」に対する反応語分析

表3、表4は、「楽しい」について5分類によってまとめたものである。

第1反応語については、次の諸傾向がみられる。

a) 5分類の中で印象反応(笑い、元気、バラ色など)以外については、各反応に分散傾向が見られる。特に集中傾向はみられない。このことは「楽しい」という意味が冒頭にも述べたように、非常に複雑なことをあらわしているということに解される。

b) 男女差については、男性では叙述反応(遊び、スポーツ、喜びなど)がトップで約3割に対し、女性では種目反応(ゲーム、おしゃべり、映画など)が約3割となっている。ごく一般的にいえば、「楽しい」というイメージについても男性は理屈、女性は活動そのものへの志向特性がみられるといえよう。

第3反応語までについては、次の諸傾向がみられる

a) 第1反応語と同様に、とくに印象反応以外は集中傾向

表3 「楽しい」における、第1反応語の傾向

分類	性別	男子(%)	女子(%)
感情反応		28 (27.4)	43 (21.4)
叙述反応		33 (32.4)	40 (19.9)
種目反応		21 (20.6)	62 (30.8)
共在反応		18 (17.6)	47 (23.4)
印象反応		2 (2.0)	9 (4.5)
その他		0 (0.0)	0 (0.0)
計		102	201

表4 「楽しい」における、第3反応語までの傾向

分類	性別	男子(%)	女子(%)
感情反応		57 (18.6)	96 (15.9)
叙述反応		68 (22.1)	108 (17.9)
種目反応		92 (30.1)	194 (32.2)
共在反応		76 (24.8)	176 (29.2)
印象反応		13 (4.3)	29 (4.8)
その他		0 (0.0)	0 (0.0)
計		306	603

がみられない。

b) 割合をみると男女とも種目反応がトップを占める。また、共在反応(友達、子供、音楽など)も多くなる。

「楽しい」というイメージの中には、活動そのものが大きなウェイトを占めてくること、およびその環境が楽しさに影響力を持つことと解される。

2) 「遊び」に対する反応語分析

「遊び」についての分類結果は表5、表6のとおりである。

表5 「遊び」における、第1反応語の傾向

分類	性別	男子(%)	女子(%)
感情反応		17 (16.7)	21 (10.4)
叙述反応		13 (12.3)	16 (8.0)
種目反応		40 (39.2)	93 (46.3)
共在反応		32 (31.4)	67 (33.3)
印象反応		0 (0.0)	4 (2.0)
その他		0 (0.0)	0 (0.0)
計		102	201

表6 「遊び」における、第3反応語までの傾向

分類	性別	男子(%)	女子(%)
感情反応		34 (11.2)	53 (8.8)
叙述反応		32 (10.6)	40 (6.6)
種目反応		122 (40.2)	282 (46.8)
共在反応		109 (36.0)	215 (35.6)
印象反応		6 (2.0)	13 (2.2)
その他		0 (0.0)	0 (0.0)
計		303	603

第1反応語については、次の諸傾向がみられた。

a) 種目反応、次に共在反応語の割合が高く、この2項目に集中傾向がみられる。このことから、「遊び」という言葉の持つ意味合い¹²⁾の中でも、直接的で実質的な意味合いでとらえられ、活動やその環境のイメージが強いことを示していると推測される。

b) 男女差をみると、同様の傾向を示しているが、種目反応について女性が男性よりも高い値を示している。

第3反応語までについての諸傾向がみられた。

- a) 第1反応語と同様に、種目反応、共有反応に集中傾向がみられる。「楽しい」と同様種目反応がトップで、共有反応も多くなっている。
- b) 男女とも同様の傾向がみられる。特に女性は種目反応が多くなっている。

「遊び」というイメージのなかには、「楽しさ」と同様に、活動そのものが大きなウェイトを占めてくること、およびその環境が遊びに影響力をもつことが解される。

2. イメージの一般傾向

反応語の数の多かった上位5種を、「楽しい」「遊び」について、第1反応語、第3反応語までのそれぞれについてまとめ検討した。

1) 「楽しい」の一般傾向

「楽しい」について第1反応語、第3反応語までをまとめたものが表7、表8である。これを再構成すると次のようになる。

<第1反応語までによる一般的イメージ>

男子→楽しさは遊び(たとえば、音楽を聞く。スポーツをする)にあって、おもしろいとかうれしい感情を伴う。

女子→楽しさは、友人や仲間と遊び(たとえば、音楽を聞いたり、ゲームをするなど)のなかにおいて、うれしさや明るさを伴う。

<第3反応語までによる一般的イメージ>

男子→楽しさは、友人や仲間と遊び(たとえばスポーツをするなど)おもしろく、うれしいものである。

女子→楽しさは、友人や仲間と遊び(たとえば、おしゃべりをしたり、音楽を聞いたりするなど)うれしいものである。

表7 「楽しい」における、第1反応語のイメージ(上位5位)

順位	男子	人数	女子	人数
1位	遊 び	18	遊 び	28
2位	おもしろい	10	うれしい	16
3位	うれしい	8	友人・仲間・友達	12
4位	音 楽	7	音 楽	9
5位	ス ポー ツ	5	明 る い	6
			ゲ ー ム	6

表8 「楽しい」における、第3反応語までのイメージ(上位5位)

順位	男子	人数	女子	人数
1位	遊 び	26	遊 び	49
2位	おもしろい	13	友人・仲間・友達	31
3位	うれしい	13	うれしい	29
4位	友人・仲間・友達	13	おしゃべり・会話	18
5位	ス ポー ツ	13	音 楽	17

以上から次の点が特徴としてあげられる。

- a) 第1反応語および第3反応語までについて男女共「遊び」が第1位であり、楽しさと遊びが合体していることがわかる。

また、上げられた反応語は感情反応、叙述反応、共有反応が多く、種目反応が少ない。このことは、「楽しい」というイメージが活動種目と直接結びつかないか、あるいは、活動種目が片寄らず、多岐にわたっているのではないかと考えられる。

- b) 第1反応語、第3反応語までおよび男女別をみても、順位は入れかわるものの、特に大きな変化はない。「楽しい」のイメージが安定しているといえよう。

- c) 直感的な反応を示すと思われる第1反応語の第4位に、男女共「音楽」があるが、「楽しい」と感ずる状況に意識するしないにかかわらず「音楽」の存在が大きなポイントとなると思われる。

- d) 男女の違いについては、男子で、第1位の「遊び」に次いで、「おもしろい」「うれしい」と個人の主観的なイメージがあり、女性では、「友人・友達・仲間」と共にいるイメージがあがっている。女性にとっては、友人そしてそれらとの会話が楽しさにとって欠かせないことが類推できる。

2) 「遊び」の一般傾向

「遊び」について第1反応語および第3反応語までの上位5種は、それぞれ表9、表10に表わしたとおりである。これを再構成すると次のようになる。

<第1反応語による一般的イメージ>

男子→遊びは、夜、女の子といっしょにいたり、スポーツやゲームに興じる楽しいものである。

女子→遊びは、友人や仲間と過ごしたり、子供の頃を思いだしたりする楽しいものである。

<第3反応語までによる一般的イメージ>

男子→遊びは、女の子や仲間達と酒を飲んだり、ゲームをしたり、マージャンをしたりする楽しいものである。

女子→遊びは、友達や仲間とゲームに興じたり、子供の心を感じさせる楽しいものである。

以上のことから、次の特徴がみられた。

- a) 第1反応語の男女、第3反応語までの男子の第1位に「楽しい」があげられ、第3反応語までの女子についても、「楽しい」は第1位と数に差がみられないことから、「遊びは楽しい」ということが代表的なイメージであるといえよう。

- b) 第1反応語の男子に、他ではみられない「夜」が入っており、興味深い。

- c) 第3反応語までについて、特に女子の1位～4位までの反応語に差がなく、安定したイメージを持っているといえよう。

- d) 男子の特徴としては、第1反応語および第3反応語までの両方において、上位2種は同じであるが、3位以下

表9 「遊び」における、第1 反応語のイメージ(上位5位)

順位	男子	人数	女子	人数
1位	楽しい	14	楽しい	16
2位	女・女の子	5	友人・友達・仲間	13
3位	夜	5	子供	13
4位	スポーツ	3	ゲーム	12
5位	ゲーム	3	ままごと	8
	ビー玉	3		
	フリスビー	3		
	かくれんぼ	3		

表10 「遊び」における、第3 反応語までのイメージ(上位5位)

順位	男子	人数	女子	人数
1位	楽しい	21	子供	35
2位	女・女の子	12	楽しい	31
3位	ゲーム	11	友人・友達・仲間	32
4位	おにごっこ	7	ゲーム	30
5位	マージャン	7	おにごっこ	15
	酒	7		
	友人・友達・仲間	7		

に多い種目反応がそれぞれについて違いがみられる。男子の「遊び」の活動種目のイメージが多様なことを示しているともみれば、個人差のあることが、うかがえよう。

- e) 種目反応の中に第1 反応語では男子「かくれんぼ」、女子「ままごと」となっている。第3 反応語まででは男女とも、「おにごっこ」が入っていることから、「遊び」のイメージは幼少時期の体験が強く印象づけられ、成長しても持ち続けていることは興味深い。

V まとめ

今回の研究は、「楽しい」「遊び」に対してのイメージの研究であったが、この研究を通して、次の知見を得ることができた。

1. 「楽しい」「遊び」のそれぞれに代表されるイメージが、「楽しい」に対して遊びが、「遊び」に対して楽しいというように、お互いに緊密関係をもっていることが明白である。前回の研究において「レクリエーション」に対するイメージの代表が、楽しい遊びであったことをみても、この三者は切ることのできない関係であることが確認された。

したがって、レクリエーション指導においても、指導者は絶えずこの三者を念頭においた指導方法、活動内容の選定に留意する必要があるだろう。

2. 前回の研究において、レクリエーションに対するイメージに男女差があまりみられなかったと同様、今回の「楽しい」「遊び」に対するイメージにも大差はみられなかった。

しかしながら、「遊び」のイメージにおいては、男女の特徴が鮮明に浮き出されたと思われる。遊びは楽しいものであるという点では、同様の傾向がみられる。しかし、女子においては、友達や仲間とゲームやおしゃべりに興じる明るいイメージであるが、男子においては、女の子、夜、酒というイメージが入ってきている。かって大人の遊びと言われた「飲む、うつ、買う」の片鱗をうかがうことができる。

すなわち、価値観が変容してきている現代においても、かって悪い遊びとされたものが、現代の若者においても具体的なイメージとしてあがっている。彼らにおいての罪悪感については、今回はうかがい知ることにはできないが、今後、この点をさらに検討してゆく必要があるように思われる。

3. 総じて、レクリエーションに対するイメージよりも、「遊び」のイメージの方が、より通俗性を内在しているものと解される。

4. 男女とも、遊び、楽しいなどのイメージの中に、幼少児体験の活動種目(鬼ごっこ、ままごと)がでていることは、幼少期のレクリエーション教育、あるいは、遊びの教育が、いかに重要であるかを意味していると思われる。

5. 男女とも、イメージの中に「音楽」があがっていることは、現代生活における音楽の存在を物語っているものであり、レクリエーション指導におけるプログラムにも音楽とのかわり大きなポイントとして示唆されていると言えよう。

上記の結果をふまえて、今後の課題として、若者におけるレクリエーションイメージの追求だけでなく、対象者を幅広く考えていくとともに、遊びのイメージ形成が幼児期にあることから、とくに保育、小学校教員に焦点をあて、彼等が遊びに対していかなるイメージを有するかその追求を図りたい。

【参考文献】

- 1) 高橋 伸他「レクリエーションに対するイメージの研究 — とくに大学生の事例比較を中心に —」レクリエーション研究16号 P72-P76 1986
- 2) 高橋和敏「レクリエーションに関するイメージの研究(第1報) 第4回レクリエーション研究会発表抄録 1968
- 3) 鈴木秀雄「ゲームに対するイメージの比較考察」第2回レクリエーション学会大会発表抄録 1972
- 4) 金崎良三「レクリエーションイメージの構造について」第5回レクリエーション学会大会発表抄録 1975
- 5) 前掲1)
- 6) 前掲1) P73
- 7) 高橋和敏他「レクリエーション概論」不昧堂 1980 P43-P46
- 8) 三隅達郎「レクリエーション」IDE教育選書 125 民主教育協会 1968 P14-P19
- 9) M. チクセントミハイム 今村浩明訳 「楽しみの社会学」思索社 1979
- 10) 「楽しみ—そのゆくえ」青年心理 42号 金子書房 1984
- 11) 鮑戸 弘「イメージの心理学」湖出版1970 P261-262
- 12) 前掲7)